

平成28年度 第6回企画展 (1月7日(土)～2月19日(日))

「常滑の火鉢」 展

常滑の火鉢は電気・ガス・石油が暖房エネルギーとして一般化する以前の明治時代から昭和30年頃に盛んに生産され、全国各地へ供給されました。当時の家庭の暖房調度品には火鉢・五徳・猫火鉢・行火などが使われていた時代の頃です。

本展の主演である火鉢の生産は、江戸時代に始まったと考えられますが、そのころの火鉢は「赤物」と呼ばれる素焼質のものや瓦質の粗雑なものでした。明治時代に入ると、今日の私達が想像する朱泥や真焼の火鉢が登場します。大正時代になると、施釉花器の生産が軌道に乗ることで、火鉢にも釉薬をかけるようになります。様々な火鉢が登場するようになります。

『常滑市誌』によれば、昭和30年代、市内には16の火鉢を生産する事業者がありました。驚く事にそれらの事業所の従業員は5～6人と小規模です。これは原料を近くの地域で入手することが可能で、複雑な設備も要しなかったことがその理由です。そのため、火鉢生産は家族労働を中心にして素地・成型・上絵付加工をおこないました。

常滑の土の特色を生かした朱泥土で作られた朱泥火鉢は、高級火鉢として知られています。これは名工がロクロの技を競い、それに牡丹や山水などの絵や漢詩、万葉集の歌などの文字を装飾として見事に彫り込んでいます。特に、初代山田常山の弟の初代山田陶山は大正時代に朱泥火鉢の名人として高い評価を受けています。

塗り火鉢は、やきものの表面に漆を塗って仕上げた火鉢のことで、昭和戦前期を中心に生産されたものです。塗り火鉢の生産画期となったのは、昭和4年に実用新案登録された蓋付の炬燵兼用火鉢「三徳火鉢」の流行です。三徳火鉢は、火鉢に蓋をして布団をかぶせて暖をとる使い方ができるもので、中に筒があり、灰の中の炭が消えないように空気の流れを工夫した構造になっています。また、炬燵として用いると中に猫がいるように見えることから猫火鉢という愛称も生まれました。

施釉火鉢は塗り火鉢と同様に昭和初期から作られるようになります。昭和10年頃から白土を化粧掛けした生地に呉須絵具などで下絵を施し、透明な釉薬を施した火鉢が開発されました。一見すると有田の高級磁器に似せた火鉢が好評で、多くの業者が競って生産しました。



朱泥火鉢



染付火鉢



三徳火鉢